HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	技術報告: 北海道大学農場における中小家畜飼育の歴史 ： 施設・圃場・家畜の変遷
Author(s)	原田, 誠
Citation	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場技術業務報告, 6, 92-93
Issue Date	2006-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34498
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_p92-93.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学農場における中小家畜飼育の歴史
-施設・圃場・家畜の変遷-

原田　誠
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

1. はじめに

札幌駅から徒歩圏内にある北海道大学キャンパス内には、大きく分けて南側に位置する第一農場と北側には第二農場（学外には余市果樹園）がある。第一農場には、家畜、作物、果樹、そ菜、養蚕などの教育研究施設があり、第二農場には、酪農生産関連の圃場および乳肉製品加工施設がある。また、第二農場に隣接し、重要文化財の旧第二農場牛舎（モデルバーン）がある。ごく最近、従来第二農場にあった牛舎が第一農場に移転し、昨年度秋より稼動している。これと同時並行して豚鶏舎施設が新規建設予定であるため、この機会に特に中小家畜関連の施設等の変遷について、現在まで保存、確認ができた資料および個人的な記憶（このため若干の誤りはご容赦願いたい）を基に紹介する。

2. 明治 34 年から大正年代

明治 34 年に、札幌農学校の北 1 条（現在の時計台周辺）から北 8 条西 7 丁目への移築に伴い、充実した学生の実習教育並びに各種試験に対応するため、新たに実験圃場を造成し、北 11 条西 7 丁目事務所本部、畜舎、収穀室、農具庫等を建て、実験実習農場として整備した。大正 7 年、北海道帝国大学の設置に伴い、北海道帝国大学農学部附属農場となり、 第一農場は実験農場、 第二農場は経営農場とした。大正 10 年の落成記念写真が何点か残されており、当時の様子を偲ばせる。当時としては近代的施設であった。明治期から保存されている古い革張りの家畜繁殖簿（札幌農学校第一農場）には、牛 (10 品種)、めん羊 (4 品種)、豚 (5 品種)、馬 (10 品種)、鶏 (20 品種) 等、当時の実験動物が記載されている。この時期は、主に生産に直結した教育研究が行われていたと推察される。

3. 昭和初期から昭和 20 年まで

昭和 20 年、農学部の学科及び講座の充実に伴い、試験研究が専門別に細分化されたことから、農場では大幅な組織改革を行い、11 部体制（作物、耕作、園芸、育種、養蚕、農産製造、畜産製造、畜産第一、畜産第二、農具、農業実習）とした。現在の中小家畜部門は、当時の畜産第一部を引き継いでおり、主に馬に関する教育研究に携わっていた。この改革により農場組織は講座直結型となり、学術研究の発展に大いに寄与した。昭和 19 年には、耕作部を畜産第一部に吸収・廃止した。

4. 昭和 20 年から昭和 38 年まで

昭和 37 年から馬を用いた各種作業に関し、トラクターの導入による機械化が開始されたことから、飼料作物圃場の区画整理と排水を主体とした基盤整備を行った。この間は、特に馬の血液型研究を推進し、さらに、家畜・家禽全般にわたる血液型遺伝子の研究に取り組んだ。昭和 38 年に、畜産第一部の圃場 10 ha を大学運動施設等の整備のために拠出し、研究対象を馬から、豚、家禽といった中小家畜主体に移行した。それに伴い、主に豚・鶏等を対象とする血液型遺伝子の研究、抗病性育種研究、家兎の生殖機構の研究、統計遺伝学的諸研究、馬の人工授精の諸研究が実施された。

5. 昭和 39 年から現在

昭和 39 年に私が採用された頃は、上記のような変革期であった。昭和 43 年には、厩舎、豚舎、鶏舎が現在の位置に建てられ、大正期から使用してきた施設から移転した。これらの施設も築 36 年になり、老朽化が進んでいる。近年では、飼料作物生産圃場として使用してきた広大な面積を、学内の共同利用施設建設用地として拠出したことから、新畜舎群が建設され、その一環として新たに中小家畜畜舎が建設中である。研究面では、中小家畜の遺伝育種および繁殖生理に関する研究等を主体に展開しており、また、自給飼料を用いた家畜生産（豚）を継続して行っていることに特徴がある。

参考文献：『北大百年史 部局史』

表1.　　圃場利用の変遷

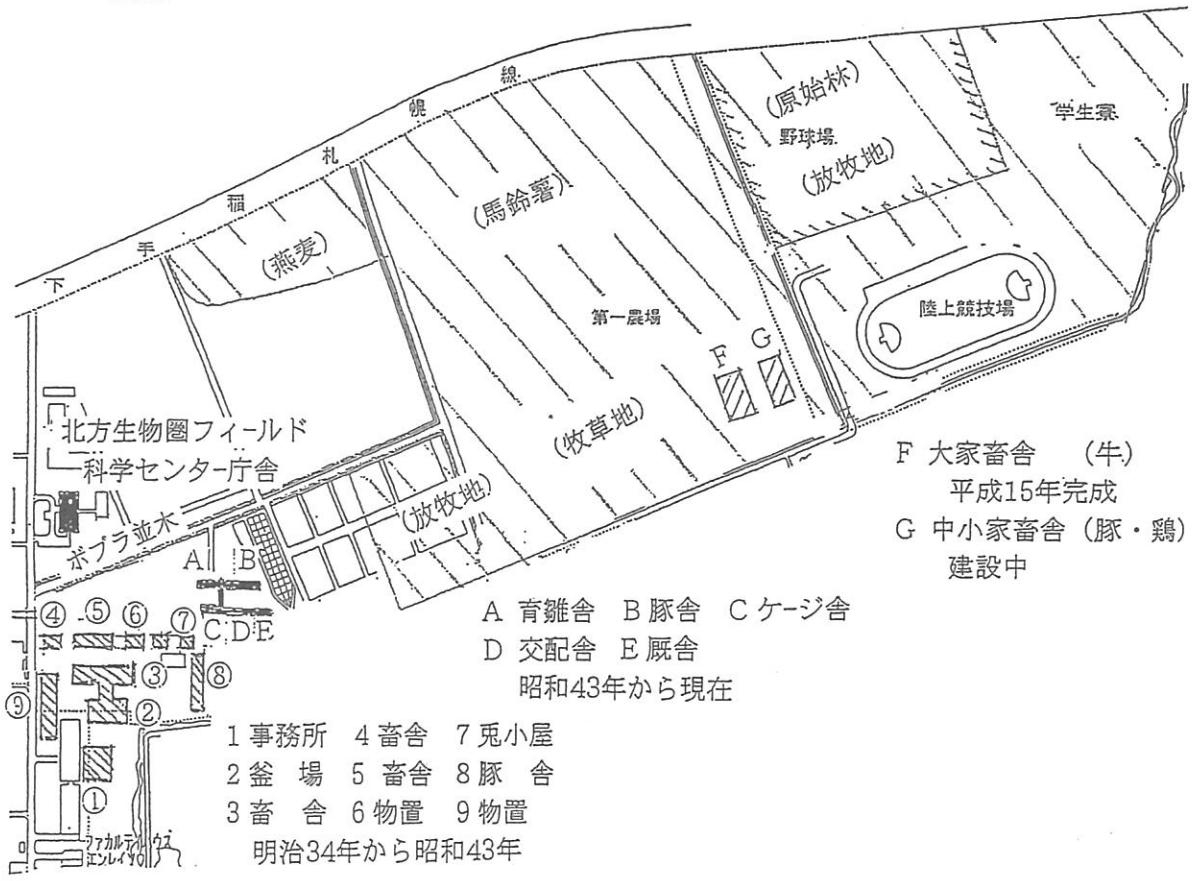
	作物作付面積（ha）										
年　　代	牧草	燕麦	子実コーン	馬鈴薯	ライ麦	小麦	カボチャ	緑　肥	放牧地	その他	合計
昭和20年頃～	10.0	4.6	0.5	3.0			0.2		3.5	人参0.1・キャベツ0.1	22.0
昭和39年頃～	5.0	1.0	2.0	2.0			0.2	1.7	0.2	人参0.1・キャベツ0.1	12.3
昭和43年頃～	5.0	1.0	2.0	2.0			0.2	1.8	0.2	キャベツ0.1	12.3
昭和58年頃～	5.0	1.0	2.0	0.6	0.3	0.3	0.2	2.7	0.2		12.3
平成5年～	4.0	1.0	2.0	0.3		3.0	0.2	1.6	0.2		12.3
平成14年	4.0	1.0	0.8	0.2	1.2		0.1	4.8	0.2		12.3
平成15年	1.0	0.7	0.5	0.2	0.6		0.1	1.0	0.2	客土地1.0	5.3

表2.　　家畜飼育頭数の変遷

	飼育家畜等頭羽数							技官数（名）	臨時職員（名）
年　　代	牛	繁殖豚	生産豚	馬／ロバ	めん羊	鶏	兎		
大正期	10種	5種		10種	4種	20種			
昭和初期～	18～27	7～30	20～25	20～25／2	6	53～107			
昭和20年頃～	1	3～4	7～10	12／2	7	80	80	8	5
昭和39年頃～		3～4	8～12	1／2		400	80	7	2
昭和43年頃～		5～7	40～72	1／2		400		7	2
昭和58年頃～		5～6	40～53	1／2		400		5	
平成5年～		6～7	39～82	1／2		400		4	
平成14年		7	51	1／3		300		4	
平成15年		7	42	1／3		300		4	

※ 平成4年以前は概数

図1.　現在の農場配置図に昭和30年代（斜線部分）の土地利用状況を重ねたもの



F 大家畜舎　（牛）
平成15年完成
G 中小家畜舎（豚・鶏）
建設中

A 育雛舎　B 豚舎　C ケージ舎
D 交配舎　E 厩舎
昭和43年から現在

1 事務所　4 畜舎　7 兎小屋
2 釜　場　5 畜舎　8 豚　舎
3 畜　舎　6 物置　9 物置
明治34年から昭和43年